

国立がん研究センター東病院肝胆膵外科

杉本 元一



私は日本肝胆膵外科学会留学制度の第九期生として、現在アメリカ留学をさせて頂いています。今回は2014年12月より2015年10月まで滞在したミネソタ州ロチェスターにあるMayo Clinicでの経験について書きたいと思います。

Mayo Clinicは全米屈指の医療施設（US news & world reportによるbest hospitalsの2015-2016年ランキング2位）で、1864年に開業、現在は3800人以上の医師・研究者および50000人以上の職員が所属しています。ロチェスターは人口11万人ほどの中小規模の町ですが、町の中心であるダウントウンはMayo Clinicの建物群を中心に形成されており、まさに医療都市と言えます。Mayo Clinicの広大な敷地には外来棟（Gonda / Mayo building）、入院棟（Methodist hospital）、救急部と一般病棟を備えるSt. Mary's Hospital、研究棟群、経営部門、医学部、図書館、また多くの飲食店、雑貨店、ホテル、デパート、職員専用の大きなジムもあります。院内は博物館のような趣があります。患者さんは市外、全米各地、海外から多く受け入れているため宿泊施設は充実しています。冬は-20℃から-30℃にもなるため、中心地にはskywayという建物間を陸上の屋内で結ぶ通路、subwayという地下通路が張り巡らされています。病院内の離れた施設や駐車場、主要なアパートとの間はシャトルバスもたくさん通っています。Mayo Clinicで働き始める際、全職種を対象として2週毎に行われているオリエンテーションを受けましたが、Mayo Clinicを発展に導いたWilliam & Charles Mayo兄弟の功績が語られ、150年間の歴史とともに発展してきた現在の病院機能が紹介され、職員としての義務や権利が説明され、院内のツアーも行われました。1日がかりのオリエンテーションでしたがMayo Clinicで働くことにとっても意欲が湧くような内容でした。

私は外科のDr. Farnellの御指導の下、最初の9ヶ月間で研究、後の1ヶ月間で臨床の見学をさせて頂きました。研究では、過去5年間3000人以上の膵腫瘍の患者さんの記録をレビューし治療成績をまとめました。膵癌患者における筋肉量低下（サルコペニア）と予後の関係、膵癌患者に対する術前治療の予後への影響、膵体尾部切除手術における術後膵液瘻対策について、研究結果を論文にまとめました。外科のDr. Farnell, Dr. Kendrick, Dr. Truty、また放射線科のDr. Takahashiや病理診断科のDr. Smyrkとも共同研究をさせて頂き、非常に充実した研究生活を送ることができました。冬はとても寒く長いので、研究には没頭しやすい環境でした。Mayo Clinicの一般外科には非常に充実した教育プログラムがあり、月曜日は6:45-7:45 M&M conference、16:00-18:00 chief resident conference（チーフレジデントのAmerican Board of Surgery対策）およびattending doctorによるgrand roundまたは招待講演、火曜日は6:30-7:30 HPB education conference（月1回journal club、月1回attending doctorによるgrand round、月2回case discussion）、12:15-13:00 HPB tumor board、金曜日は12:00-13:00 Pancreas interest group meetingがあり、全て参加す

るようにしていました。Resident や Fellow たちのプレゼンテーション能力の高さには非常に感銘を受けました。

手術と外来診療の見学もさせて頂きました。手術は attending surgeon 1 人に対しレジデントまたはフェロー、医学生がつき、助手としての technician と機械出しや外回りの看護師は決まったチームでした。外来は1日約10人程度で、特定のフロアの各部屋に患者さんが時間差で案内され、attending surgeon 1 人に対しレジデントまたはフェロー、医学生、専属の nurse practitioner や physician assistant がついてチームで回診するような形で診察し、その都度診断や治療方針を決めていました。レジデントやフェローは1-2ヶ月毎のローテーションにより、各 attending surgeon の下で手術・外来・病棟管理を行っていました。例えばある日は1人の attending とそのチームで、朝から胆嚢癌の手術、その後膵体尾部切除、その後膵頭十二指腸切除を全て予定手術として行っていました。Dr. Farnell は1日2例、ほぼ並列で2部屋を渡り歩きながら膵頭十二指腸切除を行う日も珍しくありませんでした。患者さんは Mayo Clinic 初診日に病状説明をされ、翌日には手術を受けるということもよく見受けられました。外来から手術、術後管理、その後の外来フォローアップに至るまで、医療行為以外の面でも、他医療機関との情報連携や患者さんとその家族への配慮、日程調整などの事務作業も含めて、各課程で医師以外の多くの職種が関わっており、チーム力が良く機能していると思いました。医師の臨床業務は非常に本来的で、診察と記録に限られているようでした。Dr. Kendrick の手術も見学させて頂きましたが、基本的に全例腹腔鏡下に手術をされており、チームワークの良さや卓越した手技に感動しました。

ロチェスターは田舎ですがコンパクトにまとまっていて医療関係者が多く、治安も良く、とても住みやすい町です。アイダホ州と違い日本人も多く、アジア系のスーパーもありました。同時期に滞在した日本人では同世代の先生も多く、大変お世話になりました。Mayo Clinic では数年前より、海外から訪問する外科医にとっては研究業務 (research fellow appointment) と臨床の見学 (visiting clinician appointment) とが同時にできないシステムになっています。滞在期間内にどちらも行いたい場合は、時期を別々に設定し、一方の appointment が終了する前に Mayo Clinic legal department と交渉して、もう一方の appointment のための DS-2019 を再申請し、Visitor category を変更して J visa status を取得し直す (ビザ自体はそのままでも可) 必要があります。また滞在期間に応じた funding の証明書や、医療保険への加入証をその契約内容とともに提出することが義務づけられています。滞在期間中に証明しなければならない funding については過去よりも値上がりしているようであり、長期の滞在は難しくなっている印象でした。それでも限られた期間内に臨床、研究において少しでも多くのものを得るにはとても良い環境だと感じました。

あらためまして、本留学制度を創設された高田教授、川原田教授、羽生教授、Farnell 教授、Sarr 教授、これまで本留学制度で留学された先生方、佐野教授をはじめとする国際交流委員会歴代理事の先生方、学会会員の皆様、日本肝胆膵外科学会事務局の皆様には厚く御礼を申し上げます。

2016年2月 カリフォルニア州ロサンゼルスにて



Mayo Clinic 外観と内観



Mayo Clinic から冬の景色



Dr. Farnell のお宅でご夫妻と



Dr. Kendrick と



レジデント、フェロー達と



Mayo 兄弟と